The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日元交流期の禅宗と室町幕府
Author(s)	康, 昊
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/76309
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（康 昊）	
論文題名	日元交流期の禅宗と室町幕府

論文内容の要旨

本論文では、五山禅林の思想、教学活動、仏事法会や宋元仏教との関係などの視点から、十四世紀における禅宗の展開史の再考を試みた。十四世紀においては、禅宗が国家の仏教体制に編成され、新しい体制仏教として位置づけられるようになったが、禅宗が体制化していく過程のなか、如何に自宗の正統性を明確に打ち出し、独自の教学、仏事法会、儀礼体系、伝法観を通じてその優越性と重要性を主張し、世俗の権力者に披露しようとしたのかが大きな問題となる。本論文では、禅宗と顕密仏教の思想論争、五山禅林の展開と室町幕府、中世禅宗と宋元仏教という三つの課題を中心として鎌倉末～南北朝期の禅宗の展開過程に着目している。十四世紀～十五世紀初頭における禅宗の歴史叙述、顕密仏教と禅宗の相互関係、武家の祈祷仏事における禅宗寺院の位置づけ、五山禅林と南北朝内乱と、禅宗と日元・初期日明交流の展開に関する認識を深化し、東アジアの視点で禅宗の体制化の過程をより明らかにすることができた。全体の構成は以下の通りである。

序章　十四世紀の宗教史と中世禅宗史の課題
第一章　『元亨釈書』の歴史構想における顕密仏教と禅宗
第二章　中国の台禅論争と虎関師錬
第三章　南北朝期における幕府の鎮魂仏事と五山禅林―文和三年の水陸会を中心に
第四章　五山禅林への袈裟下賜と室町殿―金襴と紫衣を中心に
第五章　東福寺円爾の伝法衣と中世禅宗の法脈意識
終章　十四世紀の五山禅林と大元ウルス時代の江南禅宗文化圏

序章では、中世宗教史における禅宗の位置づけに関する先行研究および中世宗教の転換期としての十四世紀に関わる研究を整理し、①中世禅宗の展開を考える上で重要である禅宗の歴史叙述と正統性の営為の検討、②中世禅宗と顕密仏教との相互関係の解明、③武家祈祷における禅宗仏事の役割の検証や、④元代の仏教が中世禅宗に与えた影響などの課題を取り上げている。

第一章では、禅宗と顕密仏教との関係を軸に、中世禅宗の基本史料としての『元亨釈書』の作為性と意図性を構造的に検討した。『元亨釈書』においては鎌倉時代の僧伝の採録基準がきわめていびつである。鎌倉時代は顕密仏教が仏教界の中枢にあって隆盛していたにもかかわらず、顕密寺院の僧侶は一人も立伝されなかった。平安末までの採録の客観性が逆に鎌倉時代の編纂方針のいびつさを覆い隠す役割を果たしている。このように『元亨釈書』における立伝の仕方は、平安末までと鎌倉時代とで大きく異なっている。また、『元亨釈書』が描く鎌倉時代の王権と仏教の関係は創作と虚構が顕著にうかがえる。年代記である「資治表」は、平安末までは顕密仏教と王権との関わりを詳細に叙述しているが、鎌倉時代になると顕密仏教の記事が激減し、承久の乱で記述が終わってしまう。そうすることで『元亨釈書』は、顕密仏教による王権護持の時代が終焉したことを印象づけようとした。虎関は、鎌倉時代の朝廷も、幕府も、禅僧だけに帰依していたかのような虚構の歴史を創作した。以上の操作によって、虎関は栄西の登場を機に、顕密仏教の時代から禅宗の時代へと転換したという、虚構の歴史像を作りあげようとしたと結論づけている。

第二章では、中国の台禅論争が虎関師練に与えた影響を解明した。虎関の天台教学批判は、天台宗の代表的な学説である五時教判と『楞伽経』の位置づけをめぐって展開していた。虎関は五時教判を否定し、唐代天台宗の中興湛然を強く批判した。さらに、虎関は、南宋天台宗の『釈門正統』『仏祖統紀』を否定し、禅宗の史籍『伝法正宗記』を支持した。そして、日本天台宗の典籍『伝述一心戒文』を利用し、『伝法正宗記』の西天二十八祖説に新たな論拠を提供した。虎関が生きた鎌倉末～南北朝時代は、日本だけでなく東アジア世界で、禅宗と顕密仏教・教宗との間で激しい競合が繰り広げられていた。中国仏教の台禅論争との関係を意識している本章は、宋代禅宗の教学を援引し、教

宗・顕密教学を相対化させる試みを行った虎関の思想を明らかにしている。

第三章では、文和三年（一三五四）の鎮魂水陸会を中心的素材として、室町幕府の鎮魂仏事に禅宗が参入していった歴史過程を検討した。南北朝内乱期、禅宗は鎮魂の分野で幕府の仏事に参入し、徐々に中心的役割を果たすようになった。観応の擾乱後、渡来僧・入元僧の働きかけのなかで室町幕府は元朝をモデルとした水陸会を導入した。戦時態勢の強化と財政の困難に迫られた幕府は、敢えて鎮魂仏事の開催を通じて、戦争から秩序の再建を図った。文和三年の水陸会は幕府の鎮魂仏事政策の総括と位置づけることができる。本章では、入元僧・渡来僧の視点から室町幕府の鎮魂仏事の展開過程を検討することで、東アジアを跨ぐ江南禅林の人的ネットワークの役割を解明している。

第四章では、室町殿による金襴袈裟と紫衣の下賜に着目し、金襴と紫衣の下賜が五山禅林に果たした役割を検証した。十四世紀～十五世紀における金襴袈裟の下賜の事例は室町殿に集中し、室町殿の個人的意思を表しており、室町殿の禅宗政策に深く関わっている。金襴袈裟・紫袈裟の下賜は、室町殿関係の仏事をつとめる導師の身分的昇格の役割を果たしている。金襴と紫衣の下賜は宋元仏教に由来しており、北山第において明使の前に金襴袈裟を纏って現れる足利義満も、国際スタンダードとしての金襴袈裟の意義を理解していたと推測している。

第五章では、中世の東福寺にある円爾の伝法衣に関する諸言説を軸に、その言説が展開した経緯と社会的・政治的な要因に検討した。鎌倉末期における鎌倉禅の京都進出に対抗するため、東福寺派の虎関師錬は「密庵法衣」伝承を創作した。南北朝～室町前期における五山体制の整備と内乱中の伝法衣紛失によって、東福寺は新たな「楊岐法衣」伝承を創作し、それが将軍義持期になって定着し、幕府や五山禅林に受容されようになった。室町時代の禅僧岐陽方秀は『聖一国師年譜』に、『元亨釈書』からの「密庵法衣」の言説と、東福寺内にある「楊岐法衣」の伝承と、無準師範・円爾の書簡にみえる「錦法衣」の授与を記した。こうした一連の言説を再検討することで、東福寺が直面していた社会的・政治的な情勢を明らかにしている。

終章では、本論文の成果をまとめた上で、さらに南宋仏教と元代仏教との連続性と断絶性を意識した上で「江南禅宗文化圏」という東アジア地域史の概念を提起している。十三・十四世紀の日本禅林は、江南禅宗文化圏の中心地であった江南禅宗界の変換に伴って変化しており、南宋と元代から僧録、国師号・禅師号、五山十刹・五山之上、金襴下賜などの制度をもたらした。一方、江南禅宗文化圏の制度と呼称が日本の五山禅林に意識されており、実態を伴わないにもかかわらず、イデオロギーとしての宋元仏教へ意識が日本禅林に広められた。しかし、そのような宋元仏教への憧れがみられる一方、元代の「崇教抑禅」政策による元代の仏教政策への抵抗感と、日本禅宗としての自慢も同時にみられる。最後では、十四世紀後半の東アジア海域情勢の変動を再検証することで、日本禅林と江南禅宗界との人脈の断絶による江南禅宗文化圏の解体過程を解明した上で、今後の課題を示している。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　康　昊　）	
論文審査担当者	（職）　氏　名 主 査　大阪大学　教授　川合　康 副 査　大阪大学　教授　村田　路人 副 査　大阪大学　准教授　市　大樹

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　日元交流期の禅宗と室町幕府

学位申請者　康　昊

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　　川合　康

副査　大阪大学教授　　村田　路人

副査　大阪大学准教授　　市　大樹

【論文内容の要旨】

本論文は、日本の中世宗教の転換期とされる 14 世紀において、禅宗がどのような歴史過程を経て体制仏教として確立したのかという問題を、五山禅林の思想、教学活動、仏事法会や宋元仏教との関係などの視点から、多面的に検討を行ったものである。全５章と序章・終章からなり、枚数は約 510 枚（400 字詰め換算）である。

序章「十四世紀の宗教史と中世禅宗史の課題」では、中世仏教史研究、禅宗史研究の到達点を述べたうえで、14 世紀の中世宗教史の転換期における禅宗の位置づけを解明するためには、禅宗独自の歴史叙述、顕密仏教との思想論争、禅宗の仏事法会と室町幕府との関係、元代仏教との関係、五山禅林の門派と法流について、検討することが課題であるとする。

第一章「『元亨釈書』の歴史構想における顕密仏教と禅宗」では、中世禅宗の基本史料である虎関師錬の『元亨釈書』を取り上げ、その作為性を検討した。『元亨釈書』の僧伝は、鎌倉時代に顕密仏教が隆盛していたにもかかわらず、顕密寺院の僧侶を一人も立伝せず、また年代記の「資治表」でも、鎌倉時代になると顕密仏教の記事を激減させて、鎌倉時代の朝廷・幕府が禅僧だけに帰依していたかのように意図的に操作したと論じた。こうして、鎌倉時代に顕密仏教の時代から禅宗の時代に転換したという、虚構の歴史像を作りあげたと結論づけている。

第二章では、中国の台禅論争が虎関師錬に与えた影響を解明した。虎関は、天台宗の代表的な学説である五時教判を否定し、唐代天台宗の中興湛然を厳しく批判するとともに、南宋天台宗の『釈門正統』『仏祖統紀』を否定し、禅宗の史籍『伝法正宗記』を支持したことを論じた。鎌倉末・南北朝時代は、日本だけでなく東アジア世界で、禅宗と顕密仏教・教宗との間で激しい競合が繰り広げられており、そうしたなかで、虎関が宋代禅宗の教学を援引し、教宗・顕密教学を相対化させる試みを行ったことを明らかにした。

第三章では、文和 3 年（1354）の鎮魂水陸会を中心的素材として、室町幕府の鎮魂仏事に禅宗が参入する歴史過程を検討した。観応の擾乱後に、室町幕府は渡来僧・入元僧の働きかけを受けて、元朝をモデルとした水陸会を導入するが、これは戦時態勢の強化と財政の困難に迫られた幕府が、敢えて鎮魂仏事の開催を通じて、戦争から秩序の再建を図ろうとしたものであったことを論じた。東アジアを跨ぐ江南禅林の人的ネットワークのなかで、室町幕府の鎮魂仏事の成立・展開を位置づけている。

第四章では、室町殿による禅僧への金襴袈裟と紫衣の下賜に着目し、それが五山禅林に果たした役割を検証し

た。金襴袈裟・紫衣の下賜は、室町将軍家関係の仏事の開催にともなうことが多く、宋元仏教の先例を意識しつつ、室町殿関係の仏事をつとめる導師の身分的昇格の役割を果たしていたことを明らかにした。北山第において明使の前に金襴袈裟をまとってあらわれた足利義満も、金襴袈裟の国際的意義を理解していたと指摘している。

第五章では、中世の東福寺にある円爾の伝法衣に関する諸言説を取り上げ、その言説が展開した経緯と社会的・政治的な要因を検討した。鎌倉末期に鎌倉禅の京都進出に対抗するため、東福寺派の虎関師錬は「密庵法衣」伝承を創作し、南北朝・室町前期には五山体制の整備と内乱中の伝法衣紛失によって、東福寺は新たな「楊岐法衣」伝承を創作し、それが将軍義持期になって定着し、幕府や五山禅林に受容されるようになったことを論じた。

終章では、本論文の成果を踏まえて、「江南禅宗文化圏」という東アジア地域史の概念を提起し、13・14 世紀の日本禅林に対する規定性について論じたうえで、14 世紀後半の東アジア海域情勢の変動のなかで日本禅林と江南禅宗界との人脈が断絶し、「江南禅宗文化圏」が解体したことを指摘した。

【論文審査の結果の要旨】

本論文の第一の成果は、虎関師錬の著作である『元亨釈書』や『斉北集』の精緻な分析に基づいて、虎関師錬がどのように鎌倉時代の仏教の中心であった顕密仏教を相対化し、教宗・顕密教学と教学的に対決しようとしていたのかを、実証的に論じたことである。その際、本論文では虎関の思想に影響を与えていた中国の台禅論争にまで考察の範囲を広げているが、このようなスケールの大きな考察は、日本と中国双方の歴史史料や難解な禅宗史料を自在に読み解ける筆者ならではの研究成果と評価することができ、日本・中国をはじめとする東アジア仏教史において、重要な意義をもつ論文と評価される。

第二の成果は、禅宗と室町幕府との関係を、文和 3 年に催された鎮魂水陸会（大施餓鬼）を画期とする禅宗による鎮魂仏事の展開や、室町殿による禅僧への金襴袈裟と紫衣の下賜という事例から、具体的に跡づけたことである。文和 3 年の水陸会の開催は、南北朝内乱という日本国内の社会状況を踏まえた鎮魂仏事であったが、それは元代最大規模の水陸会であった金山寺水陸会に参加したり見聞したりした渡来僧・入元僧たちが、日本に持ち込んだ可能性が高いことを説得的に論じた。また、禅僧に対する金襴袈裟と紫衣の下賜については、これまでいわれてきたような天皇・朝廷ではなく、室町殿が行ったものであったことを指摘し、それが五山禅林のなかでの禅僧の身分的上昇につながるものであったことを述べている。室町幕府による禅宗の組織化・統制という側面からも、重要な事実の解明であると思われる。

第三の成果は、中世の東福寺には、北宋・南宋の臨済僧である「楊岐法衣」「密庵法衣」と伝承される法衣が存在していたが、それらの言説が東福寺をめぐるどのような状況のなかで創作されたのかを、具体的に明らかにしたことである。鎌倉末期における鎌倉禅の京都進出に対抗するために、東福寺は無準師範の嫡流を主張する装置として「密庵法衣」を創作し、さらに南北朝～室町前期において五山体制の傍流の位置に追いやられた東福寺は、東アジア禅宗世界の嫡流を示す「楊岐法衣」を創作し、それが将軍足利義持の時代に定着したと論じた。室町将軍家においても、「源義家」の大鎧「御小袖」が源氏嫡流を表徴するものとして誇示され、相伝されるモノによって正統性が主張される同様の特徴をもっているが、禅宗の世界ではそれが国境を越えて語られることを指摘した。

本論文は以上のような優れた成果をあげたが、問題点がないわけではない。例えば、明による海禁政策によって日本との交流が断絶すると、「江南禅宗文化圏」は解体すると述べているが、それがどのように解体するのかは必ずしも明確ではなく、「江南禅宗文化圏」という概念についてさらなる検討が必要であろう。とはいえ、こうした課題は、本論文の成果を踏まえて今後検討を重ねることで明確化されるものと思われる。

以上の理由から、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。